



私の平成パチンコ史⑤ 女性とパチンコ

「女のくせに」は死語になったが…

ここ数回、私が見たり感じたりした平成のパチンコ史をまとめています。今回は、いよいよ平成最後の掲載ということで、私自身を含めた女性とパチンコの30年間に渡る関係について、少々駆け足になりますがまとめておきたいと思います。

私がパチンコを打ち始めた昭和末期の頃は、ホールの女性客といえばお婆さんか派手な水商売の方がほとんどで、従業員にも若い女性はほとんどいませんでした。また、大学卒業の際も遊技機メーカーに就職の問い合わせをしたのですが、ほとんどの会社から大卒女性ができる仕事はないとアッサリ断られました。その後ご縁があって、平成2年に業界誌記者になることができたのですが、記者仲間や関係者でさえ「パチンコが好きで知識にも多少自信がある」などと伝えると、奇異な目で見られたり女のくせにと馬鹿にされたり、女性がパチンコと関わっていききたいという姿勢が理解されることは、しばらくの間ありませんでした。

そんな状況がだんだん変わって来たのは、カード(CR)化などによってパチンコ市場が拡大し、ホール産業が女性層の取り込みに力を入れ始めてからだだったと思います。平成5年頃から、いわゆる「パチンコ屋っぽくない」オシャレな外観のホールが増え、女性優先オープンを行ったり、空調設備を整えたりブランドもののバッグを景品に置いたりして、女性が入りやすい環

境づくりに力を入れるようになりました。また、そんな様子は民放の特番などでもよく放送され、パチンコが女性を含めた

多くのファンから支持を集めるようになったと言えます。そして私自身も、たまにそうした番組に出演すると、昔の扱いが嘘のように好意的な声が集まっていったのにも、正直驚きました。ところが、そんな活況を支えていたのは射幸性の高い遊技機だったことから、業界バッシングによるイメージの悪化や連チャン自粛で一気に冷え込んだ平成9年頃からは、女性客もだんだん離れていってしまいました。以降は海物語のヒットや平成16年の規則改正による市場の持ち直しなどもありましたが、なかなか多くの女性客を呼び戻す決定打はなかったように思います。

そのような中ではありましたが、平成18年頃から「冬のソナタ」をはじめとする韓流コンテンツのパチンコが様々なメーカーから登場し、女性の関心が高まった時期もありました。当時はメーカーも女性向け説明会や体験会をしきりに開催し、テレビCMや様々な番組での紹介も功を奏してかなり多くの女性がホールに戻って来ました。

そして平成末期の現在はというと、市場の縮小によるメーカー・ホール企業の体力の衰えやイメージの悪化など、残念ながら女性云々という余裕すらなくなりつつある状況です。セクシーな萌え系アニメの台が増えたのも、目先の男性ファンを集客したい目的なのでしょう。しかし、遊技機もホールも射幸性に代わってエンターテインメント性が昔より遥かに優れていますから、何か女性にアピールできる機会はあるはずです。女性は「イメージ」を大切にす

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)



平成18年、女性ファンへのアピールが成功した「ぱちんこ冬のソナタ」体験会の様子